

国際協力事業団タンザニア事務所
事務所長 / 駐在員 / 調整員 殿

隊員番号 _____
隊員氏名 _____
派遣国 タンザニア _____
派遣隊次 14 年 1 次隊 _____
派遣職種 理数科教師 _____
出身県 宮城県 _____
身分措置 有 無 _____

第 2 号報告書(赴任 6 ヶ月目)の報告書を別添の通り提出します。

- 1 「青年海外協力隊の海外協力活動に関する合意書」の項 3 (6)に基づき提出します。
- 2 本報告書を国内での協力隊関係者への閲覧のみならず、原則として一般公開及び複写についても了承します。
- 3 本報告書を非公開とする場合は、その理由を記述します。

非公開の理由

署名 _____

目次

- 1 隊員活動報告書
- 2 隊員業務報告書
- 3 隊員業務計画書
- 4 添付資料 (有・無)

隊員活動報告書

1 第 2 号報告書(赴任 6 ヶ月目)として、以下の項目について報告します。

- (1) 任国での生活
- (2) 任国の業務水準

(1)任国での生活

a. 生活上の創意工夫

特に記述するほど工夫していることは無い。途上国(タンザニア)で生活している人ならばみな当然行っていることを普通に行っているだけである。私の任地(ングドゥ)では、水の出る時間、曜日が限られているので洗濯など、水を大量に使うことは水の出る時に行うようにしている。炊事、オガなど行うための水はタンクに溜めてあるので問題ない。途上国といっても人間が生活している場所なので特別な工夫をすることも無く普通に生活していけて当然である。

このようなことを報告書に書かせようという考え方が途上国を差別しているように感じてしまう。隊員はみな現地人の人々と同じ言葉を話し、同じ物を食べて共に生活するために来ているのだから、現地の人と同じ生活をすれば特別な工夫も必要ない。

b. 任国の人との交際

最もかわりが大きいのは、同僚の教師達である。特に理数科を担当している教師達には家に招待していただいて昼食や夕食をご馳走になったりすることもある。

また、私が町の中でたった一人の外国人ということもあり、マーケットでの買い物の帰りなどにバーで飲んでいる役人や引退した教師等に誘われて一杯ご馳走になり、話をすることがある。時には AIDS、人口、教育等まじめな話題になってしまうこともある。

近所づきあいについては、残念ながら私の住居が学校の敷地内にあり、隣に校長、その隣に教頭が住んでいるのだけなので、他の隊員のようにいつも誰かが遊びに来て話し込んでいくという状況には無い。従って現地人との交流の機会は、マーケットに買い物に行くときが最も多い。しかし、校長、教頭宅の子供達が時々遊びに来る。そのときには折り紙や、日本語を少し教えてあげるなどしている。

c. 語学の習熟度

語学に王道は無く、一朝一夕にして出来るようになるものではないということは十分承知していたつもりだが、6 ヶ月もタンザニアで生活してきた今、自分の語学の出来なさには呆れるほどである。自分ではそれなりに努力して来たつもりであったがまだまだ努力が足りないようである。スワヒリ語が十分に話せないのは仕方ないとしても、訓練所で約 3 ヶ月の訓練を受け、毎日の授業で使わなければならない英語でさえも満足に話せていない。語学が自分にとって現在最も大きな問題である。しかし、この問題を解決するには、こつこつと積み重ねていく以外に解決法がなく、努力を続けながらその時が来るのを待つしかないのである。

d. 余暇の過ごし方

赴任して6ヶ月が過ぎたが、まだまだ授業の準備に忙しくあまり余暇と呼べるほどの時間はとれていない。しかし、週末(土曜、日曜)は学校が休みなので少しのんびり出来る。特に決まった事をしていないわけではないが、私の任地ングドゥでは、毎週土曜日にマーケットが開く。このマーケットは、ングドゥ最大規模で、日常の食材から衣料品、そして牛やヤギまでが買えるものである。そのため、多くの村人はそのマーケットに足を運ぶ。ングドゥの一住人となった私もそこへ足を運び衣料品を購入し、知人に会えばタンザニア流の長い挨拶を交わして午前中(10:00~14:00)を過ごす。その後家に帰り、授業の準備の進み具合や体調により、読書や昼寝、散歩などをして過ごしている。時に、同僚教師が自分の両親や、祖父母の家につれていってくれることがあるのだが、ングドゥでは日常的に kisukuma (スクマ語) が話されていて、老人のなかには kisukuma しか話せない方もおり、そんなときには、非常に退屈な時間を過ごすことになる。

また、任地では e-mail の送受信が出来ないので、約2週間に一度メールの確認、そして、ングドゥでは手に入らない調味料や食材を買うためにムワンザに行く。以上のように余暇を過ごしている。

(2)任国の業務水準

私の任地では校長の管理が厳しく、学校の規模も小さいことから、タンザニアのセカンダリースクールでよく問題になる授業の不履行はない。実際には、各クラスにモニターと呼ばれる係りを設置し、授業の履行、不履行を、各教員のサイン、トピック、生徒のサインをノートに記入することによってチェックを行っている。この方法には、タンザニアの教師と生徒の立場は、天と地であり、教師がきちんと授業を行わなくともクラスモニターを呼び出し記入することが可能であること、逆に教師が記入を忘れてしまうと、クラスモニターがその授業の内容を理解できていないとき等には授業を行っていないことにしてしまうなどの問題点もあるが、今のところこのような不正は行われていないようである。

しかし、きちんと授業が行われている我が校においてもタンザニア全体の問題に対してはどうにもならない所がある。それは、教員が赴任してこない事である。今年度(タンザニアの o-level セカンダリースクールでは、1月から新年度が始まる。) 私の勤務先である ngudu secondary school には、4名の理数科の教師と文科系の教師が数名赴任してくる予定であったが、2月12日現在、実際に赴任して授業を行っているのは、理数科の教師1名、文系教師3名のみである。従って、赴任していない3名の理数科教師が行う予定になっていた授業は行われていない。(これは他人にかける迷惑をあまり考えないタンザニア人の一つの問題点を現しているとは私は考える。) 多くのタンザニアの学校では、このような場合、ある程度は他の先生がカバーするのであろうが、授業が行われなことが多くなってしまふ。我が校でもそれは、同じであり今のところ行われていないが、徐々に、生徒からの要望などもあり代わりの教師が授業を始めつつある。

先日、日本にはない制度がタンザニアにあったので報告する。それは、インスペクター制度である。実際には何という制度なのかよく分からないが、ここではそう呼ぶことにする。

制度の内容は次のようなものである。各州にインスペクターと呼ばれる教員を管理す

る職員(それぞれに専門の教科がある)がいて、各学校を3年に1度訪問し、すべての教師の授業を評価し、さらに、レッスンプラン、スキムブック、ログブック、生徒のノートをチェックする制度である。偶然、今年が私の勤務先である Ngudu secondary school に来る年であったので私は実際にその現場を見る事が出来た。彼らのチェックはかなり厳しい。例えば生徒のノートをチェックする際には、シラバスの各項目とノートの記述の内容をつき合わせて授業の内容を確認し、トピックが欠けていたりすると指摘され、担当した教員が他の生徒のノートをさらに集めるなどして、トピックに不足がないことを確認させられていた。また、レッスンプランやログブックについても同様に厳しいチェックが行われていたが、普段レッスンプランやログブックを書いている教師の姿など見たことがないのだが、この日に限って皆がレッスンプランを持ち、図表や模型を準備して授業を行っていた。(日々の授業では出来ないような一回限りのスペシャル授業を準備して良い評価を受け、その後は以前と同じような授業に戻ってしまう。なんか、タンザニアの現地研修会のような感じでした。) さらに授業の後にはきちんとログブックの記入も行っていた。普段あまり仕事をきちんと行っていない教師は、準備に特に苦労していたようだが何とかつじつまを合わせていたようだ。普段書いていないログブックがどこからともなく出てくることは不思議であるが、このような制度があれば、生徒が学習する最低限の知識量は確保されるのではないかと思う。

施設や設備の管理についてもきちんと行われている。私の学校には2000年の12月に日本大使館の草の根資金協力で建設された実験施設があるのだが、各実験室の壁には、実験室利用の注意や、ポスター等が貼ってあり実験室らしく管理されている。実験器具についてもある程度のものは揃っており実験も行える状況にある(化学に関しては)。しかし、実際に行われている実験の授業は、National Examination (以後 NE)に出題されるものに対する対策のみであり、理科に対する興味をひきつけるようなものは行われていない。また、各教師が専門としている教科であっても、教科書に出ている実験の結果を知らない事も少なくない。実際、私が教科書の実験について同僚教師に質問すると良く分からないことが多く、私が授業で生徒に見せるために準備をしていると、同僚教師たちもやってきて結果を気にしてああだこうだとスワヒリ語で話していることもある。また、実験器具の操作についても NE に関係の無いものについては教科書で読んだ知識しかなく操作の経験が無いために実際にどのように操作してよいのか分からないのが現実のようである。例えば、水上置換を行う際に Gas jar の中にはガスが通るための空気が必要だと私に言うこともある。この例は、タンザニア人が知識の暗記のみで教師になってしまい物事の原理を理解していない事を示唆していると考えられる。Gas jar の使い方は日本の高校生なら皆知っていることであり、このような基本的なことを自分がいかにも正しいかのように忠告されるとどう反応すべきか考えてしまう。自分よりも年上で英語もよく知っていて意外とプライドの高いタンザニア人教師にうまく納得してもらうには言葉ではなかなか難しいようである。実際にやって見せるのが最も簡単な方法のようだ。その後で原理を話すと、見せる前に比べて少し素直にきてくれている。

本来、セカンダリースクールの理科の実験というものは生徒の興味を理科にひきつけ、理科の楽しさを伝えるるために行われるべきものであるのに、教師が操作法を知らないために実験が出来ないでいる生徒たちがかわいそうである。そこで、1号報告書の中にも記述したが私は、教科書の実験をすべて行うことを目標に活動を進めてきたが、教科

書の中には、器材の関係でタンザニアでなく日本の高校でも不可能な実験や、教科書の筆者の推測で企画され、現実には結果を得られない実験なども含まれているため、すべての実験ではなくできる限りの実験を行い、その結果をパンフレット形式にまとめ、資料として残すことにした。

今年度、私は Form 2 の数学と Form4 の化学を担当するので、実験は Form4 の化学の実験を行うことになる。私自身も、中学校、高校での実験で物事の原理を探り理解するための手法を学び、理科の楽しさを知ったので、材料などの関係でなかなか満足に行く実験は出来ないかもしれないが、是非タンザニアの学生達にも物事の原理を探求する楽しさを分かってもらいたいものである。

教室での授業は知識詰め込み型で行われており、授業時間の半分以上が板書とそのコピーに当てられている教科も少なくない。この傾向は、文科系教科に強く現れており私の学校では、歴史の授業は授業時間の大半が板書のコピーに当てられている。生徒がコピーしている間教員は教室におらず、代表の生徒が板書し、他の生徒がコピーしている状況である。理数科では、板書のみで終わってしまう授業をする教師はいない。なかにはきちんと解説をして、最後に理解度のチェックをするために演習を行っている教員もいる。しかし、解説の内容は、教科書に書いてあることそのまま終わってしまうことが多く、そのことが実際の社会の中でどう役に立つのか、或いはある公式を使うと回答を簡単に導けるが、その公式がどうしてその問題適応できるのか、なぜその解法で正しいのかといった解説は行われていないのが現状である。生徒も目的は NE にパスすることだけなのでそれで十分満足しており、私が上記の事柄について説明しても聞く耳をもたないのが現状である。

また、難しい問題については、間違いを恐れ自分で解答を導こうとせず、教師が解答を書くのを待っている。これは大きな問題であると私は考える。なぜなら、解法のみを求め、その背景を学ぼうとしない態度は自分に何かを教えてくれる人がいて、問題を与えてくれて、その正解を最後に教えてくれている限りはそれでいいかもしれないが、いずれは自分で問題を見つけその問題を解決していかなければならない時が来る。学生のとくに自分で問題を見つけそれを追及する手法を身につけなかったら、将来的に何も出来ない人間になってしまう。また、間違いを恐れ、見せ掛けの難しさに惑わされ、自分なりの解法で答えを導こうとしない態度も同様に何も自分では出来ない人間を育てることになる。タンザニアの学生がこのようになってしまうのは、タンザニアの教育の問題なのか、歴史的な背景が問題なのか、気候のせいなのか、よく分からないが、これはタンザニアの存続に関わるとても大きな問題だと思う。

今の学生がこのまま A-level を卒業し、大学を卒業し社会に出たとして何が出来るだろうか、おそらく出来るのは大量の援助という名のお金を投入して自分達の意のままに途上国をコントロールしようとしている先進国の言いなりになることだけである。なぜなら、彼らは、何が問題で今自分たちに何が必要でどうしたらそれを解決できるかを考えることが出来ない、しかし豊かになりたいので豊かな者にすがって何とかしようとするが、そこには自分達の思想がないからである。したがって、先進国の成すがままになってしまう。

タンザニア人が問題を解決しようとしなない事例をひとつ挙げたほうが説得力があるので、一つ紹介する。それは今年の 10 月頃、配属先にパンフレットを届けに、どこだか忘れてしまったがカレッジで教えている教員が来た時の話である。彼が私に「タンザニアはどうだ」と、よくタンザニア人がするどう答えてよいのか分からない漠然とした質問にたいして私が「良い所だよ」とこたえた時に彼がいった言葉、「日本はいいよなすごく工業化されていて綺麗だし、それに比べてタンザニアはなあ。タンザニアも日本のようになりたいけど国がこうだから」。もちろん彼は英語で話したのだが今その英語を思い出すことは出来ない。さらに、この日本語訳には私の感情が含まれていることも否定できない。しかし、私はこの言葉にショックを受け言葉を失った。タンザニア人はこんなに簡単に物事を諦めるのかと、国を変えるのはあなた達じゃないのかと思いつつその後彼と話をする気もなくなってしまった。

こんな人間を自分が教えた学校からは出たくないの、生徒に少々嫌がられようとも、自分で考えて自分で答えを出させる授業をしていきたい。

NE にパスさせることと、理数科に興味を持たせることが両立しない問題であり、隊員の中でもどちらにウェイトを置くべきなのか、しばしば議論されているが、私は興味をもたせることにウェイトを起きたい。「好きこそ物の上手なれ」と我々日本人の先輩達は云ったものだ。好きになれば勉強したくなる、そして勉強するようになる、勉強するようになれば試験でも得点できるようになると考えている。また、偉大な発明家トーマスエジソンは、学校の勉強は出来なかった。しかし、彼の人生は成功したと誰もが認めるであろう。彼がなぜ成功したかその理由を私はこう考える。自分の好きなことを見つけそれを追求したからである。

だいぶ報告書の内容から離れてしまったが、私はタンザニアの生徒が一人でも多く、数学が楽しい、理科が楽しい、と感じ、何でこの公式が導けるの？、どうしてこんな変化が起こるのか？、もっとその原因が知りたいといってくれるような授業をしていきたい。

以上

隊員業務報告書

作成日：2003 年 2 月 28 日

第 2 号報告 派遣国：タンザニア 隊次：14 年 1 次隊 職種：理数科教師 氏名：

| 業務計画 | 計画していた業務内容等。 |
|-------------|---------------------------------|
| A 全て達成できた | 1. 生徒のレベル・理解度の把握 |
| B ほぼ達成できた | 2. 教師の知識レベルの把握 |
| C 半分達成できた | 3. 実験設備・材料の把握 |
| D あまり達成できず | 4. 授業の状況の確認 |
| E 全然達成できず | 5. 自分の英語力の向上 |
| F その他 | 6 |
| | 7 |
| | 8 |
| 自己評価：B | 9 |
| 業務内容 | 実際に活動した業務内容等。 |
| | 1 毎日の授業 |
| | 2 希望する生徒に対する実験による復習 |
| | 3 実験に関する資料作り |
| | 4 |
| | 5 |
| | 6 |
| | 7 |
| | 8 |
| | 9 |
| 活動成果 | 現在進めている業務の進捗状況や成果等。 |
| A 大変成果がでた | 1 実験の課外授業を行っている。 |
| B 良い成果がでた | 2 1の結果、同僚教師が実験を取り入れて解説する授業を始めた。 |
| C ある程度成果がでた | 3 実験に関する資料作り |
| D 余り成果がでず | 4 |
| E 全然成果がでず | 5 |
| F その他 | 6 |
| | 7 |
| | 8 |
| 自己評価：C | 9 |
| 特記事項 | 業務上で直面している課題や問題点等 |
| | 1 |
| | 2 |
| | 3 |
| | 4 |
| | 5 |
| | 6 |

第 2 号報告 派遣国：タンザニア 隊次：14 年 1 次隊 職種：理数科教師 氏名：

| | 業務計画 | 活動継続期間 | | |
|-------------------------|---|--------------------|--|--|
| 活動目標 | 活動内容 | | | |
| | 第 2 号報告書までの 3 ヶ月 | 赴任 4～6 ヶ月 | | |
| | | 14 年 11 月～15 年 1 月 | | |
| 学校の状況をきちんと把握する | 1. 生徒のレベル・理解度の把握 | | | |
| | 2. 教師の知識レベルの把握 | | | |
| | 3. 実験設備・材料の把握 | | | |
| | 4. 授業の状況の確認 | | | |
| | 5. 自分の英語力の向上 | | | |
| | 第 2 号報告書から 3 ヶ月 | 赴任 7～9 ヶ月 | | |
| | | 15 年 2 月～4 月 | | |
| 生徒の意識改革 | 1. 覚える事ではなく考える事を意識させる | | | |
| | 2. 間違いを沢山させる | | | |
| | 3. 未知の問題に対しても自分なりの答えを出せるようにする | | | |
| | 4. 自分の英語力の向上 | | | |
| | 第 3 号報告書まで | 赴任 10～12 ヶ月 | | |
| | | 15 年 5 月から 7 月 | | |
| 理数科が嫌い、苦手な子供たちに興味を持たせる。 | 1. 実験・実習をできるかぎり行う | | | |
| | 2. 補習の開始 | | | |
| | 3. 自分の英語力の向上 | | | |
| | 第 3 号報告書から 3 ヶ月 | 赴任 13～15 ヶ月 | | |
| | | 15 年 8 月～10 月 | | |
| 理数科の楽しさを伝える | 1. 教科の学習とは異なる楽しい理科実験を行う | | | |
| | 2. 補習の継続 | | | |
| | 3. 英語学習の継続 | | | |
| | 4. スワヒリ語での解説に挑戦 | | | |
| | 第 4 号報告書まで | 赴任 16～18 ヶ月 | | |
| | | 15 年 11 月～16 年 1 月 | | |
| 教師に対して少し働きかけてみる。 | 1. 教えることではなく共に考えることが生徒の学力の向上につながることを密かに伝えたい | | | |
| | 2. あまり威張らなくても生徒は言うことを聞くと思う | | | |
| | 3. 補習の継続 | | | |
| | 4. 英語の学習の継続 | | | |
| | 5. スワヒリ語の学習の継続 | | | |

| | 第4号報告書から3ヶ月 | 赴任19~21ヶ月 | | |
|-----------------------------|---|-----------|--|--|
| | | 16年2月~4月 | | |
| 生徒に本当の学習を教える | 1. 暗記からは何も生まれないことを伝えたい | | | |
| | 2. 大切なことは正解を導くことではなくて、なぜそれが正解なのかを説明できることだということを伝えたい | | | |
| | 3. 根拠の無い正解は不正解と同じであることを知ってほしい | | | |
| | 4. 語学の学習の継続 | | | |
| | 5. 補習の継続 | | | |
| | 最終報告書へ向けて | 赴任22~24ヶ月 | | |
| | | 16年5月~7月 | | |
| 学ぶことの楽しさ、学び続けることの大切さを共に考える。 | 1. 生徒が説明をする授業を企画する | | | |
| | 2. 楽しい実験の継続 | | | |
| | 3. 語学の学習の継続 | | | |
| | 4. 補習の継続 | | | |